

大東亜へ邁進せよ

——台湾における文学動員——

李 文卿

(訳 青木沙弥香)

はじめに

日本が大東亜共栄圏を打ち立てると、植民地であった台湾においても、大日本帝国の南進の基盤建設が進められた。⁽¹⁾⁽²⁾日中戦争勃発後から、台湾の知識人はさまざまな方法で、来る戦時に対応していった。植民地特有の曖昧かつ複雑なアイデンティティに向き合わざるを得なくなったとき、台湾の作家は、ある者は大陸に進出することを選択し、ある者は島内に留まってしばらく沈黙し、またある者はきつぱりと帝国翼賛の列に加わり、いわゆる「皇民作家」となった。日本の植民地政策は、教育・経済・文化方面の具体策が固まると、三〇年代には安定期に入った。台

湾社会の日本と異質な部分は、長期にわたる植民統治のなかで徐々に消滅し、日本の「国語」教育の下、台湾人民も次第に変質させられていった。⁽³⁾もう少し正確に言えば、民族が有する「台湾的」な部分が、だんだんと日本のプロレタリア思想と一致し、「階級的」視野に組み込まれたのである。⁽⁴⁾種族上の台湾人・日本人という区別から「階級的」対立への転換期は、日本が長期間押し進めてきた同化政策と日本内地における文化思潮の植民地への拡大に、確かな効果があらわれた時期である。とりわけ「脱漢化」という点での成果を、はつきりとみてとれる。⁽⁵⁾一九三七年四月、台湾総督府は台湾の学校教育課程から漢文を廃除し、同時に新聞の漢文欄を廃止した。⁽⁶⁾この挙は、植民地政府が公に漢民族の文化を放棄せよと示したものである。植民地政

府は、戦争へと突き進むなかで、速やかに「皇民化運動」を推進し、短期間で「一体」思想の形成を目論んだ。戦争促進の情勢を受け、植民地に対する同化運動およびアイ

デンティティ確立のための政策は、さらに積極的に進められた。また、文壇の改造も戦争文化政策の一環とされ、知識人に対して総動員令を発すると同時に、作品公募活動や文学懇談会を催し、皇国日本のイメージづくりが企図された。本論は、一九三七年以降の台湾文壇の発展および台湾の文芸出版活動と、戦時における台湾作家それぞれのスタンスを研究対象に、日本帝国の文化共栄圏建設計画のなかの台湾像と、台湾知識人の「東亜共栄」への期待を論ずるものである。いったい「皇民文学」が戦時期に存在したのは、台湾文壇の体制化のいかなるあらわれなのか。戦争体制の一環としての「皇民文学」を、いかに読むべきか。以下では特に、植民初期の不安定さを抜け、安定した植民システムに組み込まれた社会において、文化アイデンティティがどのような様相を呈していたか、また戦争という外力の干渉下で文学はどのような方向へ進んでいったか、台湾の文学者は「大東亜共栄圏」をどのように解釈して新しい世界観を構築したのか、という問題を中心に述べていきたい。

一 文学の変調——皇民文学の提唱——

日中戦争勃発以後、総督府台湾軍司令部は「非国民的言動」を厳しく禁止する声明を発表すると同時に、戦時体制への突入を宣言し、国民精神総動員本部を設置すると、台湾民衆に向けて、いかに「八紘一宇」・「挙国一致」思想を貫徹するかという指導を行った。このほか、物質的にも心情的にも台湾国民の総動員を徹底させるため、「皇民化運動」を展開した。「国民国家」概念の唱導にともない、三〇年代初めに飛躍的な発展を遂げていた台湾文壇は、漢文欄の禁止と総督府の積極的な体制翼賛政策の下、低迷期に入った。黄得時は、当時の状況を以下のように記録している。

支那事変の勃発と共に、本島の文学活動も一時に停滞を来し、昭和十五年一月一日「文芸台湾」が創刊せられるまでの二年半といふものは、僅かに台湾新民報紙上の新鋭中編小説の企画以外に、文学活動もなければ、文芸雑誌もなかつた。この二年半は、云はず台湾文学運動の一つの空白時代である。^⑧

戦時情勢の影響を受け、台湾文壇は新たな転換期に直面した。執筆停止に追い込まれた漢文作家から日本語で作品を書いていた日本文作家まで、すべての作家が新時局の下で

「スタイルの転換」を迫られたことも、台湾文壇に黄得時のいう「二年半の空白期」をもたらした原因であった。文芸の空白という嘆かわしい状態に、作家たちもまた、新時代の社会に適応するため、アジアの情勢に目を向けざるを得なくなつた。日本帝国主義の拡張に伴つて、皇民化運動と皇民文学が戦時期台湾の社会と文壇を指導するようになり、総督府の国民国家養成政策によつて、文学奉公活動が台湾文学界において回避を許されない方針となつていつた。注目に値するのは、植民地における翼賛の推進は、必ずしも植民者の希望通り直線的に発展したわけではないということである。かえつて、新たな状況に対するさまざまな模索や討議、また文化翼賛の過程で表面化した曖昧な理論が、皇民文学に新たな思索の可能性を提供したのである。転換点に直面した台湾文学者たちは、文化翼賛活動のなかで、国策と文芸の間にかなる道を見出したのか。いわゆる「皇民文学」からは、新たな時代に生きる植民地知識人の心を窺い知ることができるとは、必ずではない。

台湾文学の「奉公文学」への改造の契機は、主に二つの方向から検討される。一つは戦争による文学的自由の「断裂」、もう一つは、台湾作家と在台日本人作家の対話上での相互提携が従属関係へと変化する、その転換過程である。台湾の日文作家は、三〇年代初期から徐々に成熟期に入り、張文環・呂嚇若・巫永福・楊逵・龍瑛宗などが登場

した。これらの作家は、作中で植民地知識人のアイデンティティ喪失への焦慮や台湾特有の地方風土・民情を表現し、日本語が書面語となり日増しに普及していく台湾文化界の筆頭選手となつた。しかし戦時期に入つてから、これらの作家は在台日本人作家とともに「翼賛文学」の宣伝活動に従事するよう、当局から要求された。日本帝国主義の高揚と軍政府の圧力の下、台湾文壇は三〇年代初期からの文芸の積み重ねを断たれてしまつた。文学運動の中断に加え、戦争気分が高まつたことで、皇民文学が新たな手本として戦時期の台湾文壇をリードし、総督府の政策で「以筆代槍」（筆を以て槍に代える）文学運動が戦争翼賛の重要な手段となつた。一九三七年から、台湾総督府によつて各紙の漢文欄が廃止されると、台湾文壇は大きな変化に直面した。一九三七年二月二七日の『大阪朝日新聞台湾版』には、すでに漢文欄を廃止する声明が発表されている。その一文「島内紙漢文欄愈よ廃止決定」は、以下のように述べる。

総督府の国語第一主義といふ国策に順応して台湾島内で発行してゐる各新聞がいよいよ一斉に漢文欄を廃止し全面悉くを邦文で埋めることとなつた。すなはち従来台湾におけるすべての新聞雑誌は台湾本島人への当然の訴求条件として邦文のほかに台湾土語による漢文欄を設け、邦漢両文を併用して来たが、始政すでに

四十二年を經過し当局の國語普及に努力し來れる結果として全島の國語解者も相当高率を示し、さきに公學校教育の一部を改正、漢文科を廢止するあり、島民の一部階級を除いてはいまや漸次漢文を必要とせざるまでに立ち至つたので、國語による國體觀念の明徴が叫ばれる今日断然漢文欄を撤廢すべしとの意見が有力となり、このほど島内日刊新聞各社の間に寄々協議が進められてゐたところ、いよいよ來る四月一日より台灣日日、台灣、台南の三紙が率先して漢文欄廢止を断行新報も六月よりこれに追隨することに決定、三月一日付の各紙紙上をもつて右の旨の申合せによる声明を各紙それぞれに社告することとなつた。

國體の需要に答えるため、總督府は「國語」教育を推進することで植民地勢力をさらに結束させ、來るべき戰爭に備へて、台灣と中国内地との連絡を細部まで断ち切る必要があつた。これによつて、一部の漢文作家は、日本語がでないために執筆を停止せざるを得なくなつた。また日文での創作能力があつたとしても、戰爭熱の下、プロレタリア作家であるうが時局の支配を受け、願はずして政治的意味を持つ皇民文學を書かなくてはならず、加えて當時の文壇のリーダーが前後して台灣を離れた衝撃で、楊達のように隱居状態になる作家もいた。日本政府は漢文欄廢止による不滿を和らげるため、一九三七年から『大阪朝日新聞』

の台灣版に、週一回の「南島文芸欄」を設け、台灣作家の作品發表の場とした。しかし言語は制限され、台灣作家は日文以外での表現を禁止された。

皇民化運動の推進にともない、台灣總督府は一九三七年七月に「臨時情報委員會」の設置を決定した。その主な職務は、戰時の状況に呼応し、文芸方面での宣伝とそれによる國家意識の強化を図り、また各地の関連活動を監督することであつた。その後、戰爭の激化により、臨時情報委員會の責務が繁雜になつたため、總督府は同年八月に情報委員會の設置を決定し、九月には併せて國民精神總動員本部を設けた。これらの戰時体制の構築は、都合よく人民を支配し、戰時に応じた施策を順調に進めることを目的としていた。戰時の緊張が高まるなかで、總督府は一九四三年、さらに台灣文學奉公會を設立し、總督府機關紙の月刊『台灣時報』を發行するほか、皇民文學會議の開催や皇民文學集の出版に力を入れた。ここに至つて、皇民文學はその推進發展に責任を負う専門機關を有することとなり、もはや他の情報委員會や関連戰時組織、民間社団と共同で事にあたる必要はなくなつた。皇民文學の創作は、提携合作方式から命令形式へと変わり、戰時期の台灣文壇はその雰囲気の下で文學活動を展開しなげばならなかつた。台灣の作家たちは、眼前の苦境をどのように考えていたのだろうか。徐瓊二は以下のような意見を提出している。

官にして文学に関し斯る関心を持つてゐるからには島内の文学運動にも更に一層の助長と發展を促すだけの準備あるべきに違ひない。といふことだ。寧ろこちらからその協力を持込むこともあつて然るべきである。如何なる方法を持つて協力連絡して行くか、これが今後に残された宿題ではなからうか。要は芸術文化發展の為に政治的活動が現情勢にあつては特に強く要求されねばならぬといふことである。この宿題を解決するキツカケが案外目の前にブラついてゐるのかも知らないといふ、私は何かしら今その暗示をされてゐる様な気がする。

總督府が文化界の体制翼賛活動を必要としてゐる状況を見極めながらも、台湾文壇はまた、一定の發展を望んでゐた。台湾の作家たちが思案したのは、徐瓊二の指摘にもみえるように、いかにして政策と芸術の間に妥協点を見出し、台湾文壇の發展につなげるか、ということであつた。戦時期という特殊な状況の下、長期にわたつて周縁化されてゐた台湾文化は、ついに帝国のなかでしかるべき地位を確立する機会を得た。それは抑圧されてゐた文壇を大いに奮い立たせ、どのように台湾文学を進展させていくか、台湾文学をどのように高いレベルまで押し上げていくか、などの議題も繰り返し討論された。

文壇の変調の主要な原因は、皇民化運動の高揚であつ

た。政治力が介入するため、それは強力な主導性を有してゐた。しかし、植民地政府の文化政策はまた、植民地の知識人に新たな文化想像の可能性を提供した。台湾は、南方の片隅から帝国の中心に進出する道を手に入れたのである。大東亜建設の舞台を借りて台湾の存在を示し、アジア各国・各地域と新たな連合体を形成する。漢字・儒教・法律など中国から東アジアへ伝播した共通の文化を受け継ぎ、未来の東アジアを切り開くという任務を遂行し、南進の礎となる。これは、「大東亜共栄圏」のニーズに完全に答えるものでもあつた。日本が主導的立場にあるとはいへ、長年周縁にあつた台湾文芸界に新たな胎動をもたらすには十分であつた。張星建は、この情勢に対して、以下のように論じてゐる。

事実今日まで外来文化が創作文化をリードして来たのである。本島が南方共栄圏の基地として面目を保つて行くには、今後独自文化の創造に努力し、島民の一般文化生活を世界水準まで高めて行かなければならぬ。

作家たちが戦時の局面から文壇の新しい道を見出そうと企図したことは確かなようであるが、また統治者の強力な主導・宣伝によつて大東亜共栄の美しいイメージが眼前に作り上げられたことも、文壇を活気づかせた要因であつた。帝国がアジアを跋扈した際も、中国を含めたアジアの

現状は大々的な宣伝を通して台湾に伝えられた。帝国のアジア建設の幻像が知識人にさらなる幻想と希望を抱かせ、彼らは「聖戦」への協力者としての道に引き入れられたのである。

総督府は一九四一年に、大政翼賛組織の一環として「皇民奉公会」を設立し、これを台湾版の大政翼賛会と位置づけた。皇民奉公会は機関紙『新建設』を発行し、戦時新体制の確立を推し進めたが、なかでも文化教育新体制の確立事業は、文壇に直接影響を及ぼした。日本当局は文化建設の必要性を把握しており、台湾を日中間の架け橋とすることが十分可能であると考えた。そのため、大東亜戦争勃発後、文化翼賛の呼び声が台湾全土で高潮すると、台湾は南方基地として前線におけるさまざまな需要に答えるばかりでなく、台湾出身者は日本が占領した中国の満州・華北・華中といった地域で、仲介者としての役割をはたした。主要敵国が米英へと交代し戦争が長期化したことに加え、中国に一定の勢力基盤を築いたことで、日本は「日支一家」のスローガンを強調し、台湾知識人の、中国古典文学の紹介役としての使命感を煽った。それを受けた知識人たちは、文学で日中間の橋渡し役を務めることができると考えたのである。呂赫若は、一九四二年三月一四日の日記に、

以下のように書いている。
夜、稍々気分がよいので、昨年来放棄の状態にあつ

た「紅樓夢」の翻訳に手本つけた。やはり十年かかってもよい。必ず翻訳してこの傑作を世に広めよう、それが台湾人としての自己の義務なのだ。⁽¹⁷⁾

張星建もまた、「台湾芸術界への期待」という一文のなかで次のように述べる。

本島固有文化の整理、そして、南方基地として恥しくない独自の創作文化の建設、日支文化交叉点としての翻訳文化の積極的努力、これが明日の本島文壇に課せられた三大問題である。⁽¹⁸⁾

文化翼賛活動という点から、この台湾の作家たちの翻訳事業への期待をうかがうと、時勢が総動員状態に突入するなか、統治政府に迎合した政策文学を執筆するよりも翻訳によって文化交流を促進するほうがより理想的な選択である、という態度がうかがえる。国策に沿って活動しながらも、政治的色彩が濃厚な皇民文学の創作を免れることができ、また奉公の任務もはたすことができるからである。皇民文学が本格的に発表されはじめたのは、井手勇の研究によれば、一九四三年のなかばごろであるという。「皇民文学」の語がはじめて登場したのは、『台湾公論』の一九四三年五月号に載せられた、田中保男の「私は斯う思ふ——台湾の文学のために——」という一文であろう。

また、国語の美しさは、傑れた芸術家によつてはじめて護られる点に思ひをいたしたとき、本島人作家な

るが故に許さる〇と妄信する国語力の未熟は、根本的に皇民として恥辱であることに思ひ及び、さらにきびしく自らを鍊へあげ、まづ完全なる国語修得に努め、国語による表現力を自由に、豊かにしたとき、正しい皇民文学は確立され、作家としての地歩を不動たらしむるのである。

田中保男が「皇民文学」の一語を提出した後、同年発行の『文芸台湾』六巻一号上で、西川満が「皇国文学」という語を使用した^⑩が、一九四三年六月一日に発行された六巻二号では、西川もまた「皇民文学」の語を使用している。

われわれは心を豊にしよう。台湾の文学界であることを誇としよう。ぐうたらな、不平不満な、無気力な、無節操な生活の中からどうして、日本文学の一環としての、光輝ある皇民文学を樹立し得よう。

このときから、各新聞記事・雑誌上で、「皇民文学」の語が普遍的に使用されるようになり、奉公体制のなかで統一的に打ち出されていった。

戦時期、日本内地では「新体制樹立」から「国民精神総動員運動」への展開、さらに「大政翼賛運動」の提唱と、次々に政策が改変され、それが台湾文壇の奉公活動を牽引し、文化人もまたその変動していく状況のなかで奉公活動に参加した。「皇民文学」は、戦時期特有の文学現象であり、この時期は台湾文学史上でも特殊な一段であるといえ

る。皇民文学の題材は広範にわたっており、台湾本島の作家には、台湾の文化や風俗を描いた作品以外にも、時代を映した作品も少なからずみられ、それは当時の歴史的背景の中で、それなりの価値を有している。また日本人作家の作品は、戦時体制を鼓吹する内容を多く含むとはいえ、仔細にながめれば、そのなかに国策ではない文学風景を見出すことができる。日本の建設する民族主義の下では、植民地の一員である台湾文化人も、一段低く扱われるとはいえ、名義上は日本人であった。しかし戦況が最も緊迫した際には、内地日本人の優越感を満たす存在としても政治的圧力の下で妥協を余儀なくされ、台湾人は総督府から国家動員令が出されれば、實際上それに抵抗する力をもたなかったのである。そのような状況下で、奉公運動に加わらざるを得なかった台湾文化人が、消極的な「皇民文学」創作から、より建設的な「大東亜文学」に期待を寄せたことは、注目すべき事実である。

二 国家・国民・地方主義

台湾総督府は「国語」教育を通して、国家主義・皇国至上主義を直接的に植民地の民衆へと植え付け、植民地のナショナル・アイデンティティを形成し、日本国民として必要な、国家に対する自覚を固めようと意図した。日本は近

代以来、国家概念の養成に力を入れており、植民地の「国語」政策もまた、強烈な排他性を持っていた。それは、現代国家が示すべき共同体の概念と相表裏する関係にあるものである。日本は国語教育をもって国家概念の確立を促進したが、この国家概念は後に日本特有の皇道思想と合流し、さらには右翼思想とファシズム主義の影響を受けて帝国主義へと発展して、東アジアに大日本帝国を建設せんとする計画へと至った。⁽²²⁾一九三七年、日中戦争が勃発すると、日本政府は台湾人に「祖国意識」が芽生えるのを防ぎ、日本国家への忠誠心を育てるため、大規模な皇民化運動を展開し、積極的に国語普及につとめた。『大阪朝日新聞台湾版』・『台湾日日新報』・『大阪毎日新聞台湾版』など、当時の新聞のすべてに、総督府による国語使用の呼びかけや国語養成に関する記事がみられる。三十七年以降の、総督府が極力推進した国語運動は、台湾人の愛国意識を育てることを第一目的にしていたといえよう。

一九三六年一月一日の『新高新報』は、総督府内務大臣後藤文夫の「国民の奮起と自覚を望む」という一文を載せた。後藤は日本国体の崇高無比であること、また皇統を守護する奉公の道を説き、建国の大義と純粹な国民精神を示せと呼びかけている。この一文が、皇民化運動の前哨であった。⁽²³⁾同年の『台南新報』上には、台湾軍司令部の「国家総動員に就いて」という特別記事が登載された。文中で

は、欧州大戦以降の国際関係の緊張状態を説き、総動員の関連事業を詳述したうえで、民衆に対する総動員の方法について細かく解説している。それは物資・工場・運輸通信などの施設の管理運用から、人員団体の統制にまで及んでおり、軍部が「総動員」に関して事前に細かい指針を立て、来るべき戦時に備えようとしていたことが知れる。⁽²⁴⁾軍部による新聞・雑誌上での事前予告により、台湾の戦時気分は日増しに高まっていった。戦争勃発後、日本は合理化・絶対化・神聖化した戦争叙事によって、帝国の共栄神話を創り上げ、一元化された叙述により侵略の野心を美化し、戦争の信念を大衆にまで及ぼそうと企図した。日中戦争が始まると、台湾総督府は皇民化運動を拡大し、国家・国民意識の養成計画を押し進めた。また新聞・雑誌媒体を通じての宣伝および政策遂行の際に、総督府は日台一体のスローガンを打ち出し、皇民化運動による更なる台湾人のアイデンティティ強化を図った。

その後、戦争の長期化により、日本政府は政策を調整せざるを得なくなり、植民地もまた総督府の主導で一連の翼賛事業を展開し、皇民化運動と国語教育を強化した。一九四〇年に成立した第二次近衛文麿内閣は、基本国策要綱を制定し、「八紘一宇」思想の実践を基本方針として示したほか、大東亜新秩序建設のための強力な新政治体制を確立した。戦争の拡大にともない、当局は植民地統治政策に修

正を加え、「皇民化運動」を強化するとともに「戦時経済体制」・「国民精神動員体制」を施行した。さらに一九四〇年一〇月、日本本国に戦時統治団体「大政翼賛会」が組織され、岸田国土が文化部長に就任した。近衛首相は、大政翼賛会の成立声明のなかで以下のように述べた。

わが大政翼賛の運動こそは、古き自由放任の姿を捨てて新しき国家奉仕の態勢を整えんとするものであります。(中略)大政翼賛運動綱領については、準備委員の会合においても数次、真剣なる論議が行なわれたことを承つて居ります。しかしながら、本運動の綱領は、大政翼賛の臣道実践ということに尽きると信ぜられるのであります。このことをお誓い申上げられるのであります。これ以外には綱領も宣言もなしとい得るであります。もしこの場合において、宣言綱領を私に表明すべしといわれるならば、それは「大政翼賛の臣道実践」ということであり、「上御一人に対し奉り、日夜それぞれの立場において奉公の誠をいたす」ということに尽きると存するのであります。かく考えて来て、本日は綱領、宣言を発表致さざることに私は決心致しました。

大政翼賛会は、八紘一宇の精神を国家の基本信念に据え、天皇を至尊とする指導原則の下、民心を一つにして新体制を確立しようとした。また、大東亜共栄体制の完成を

囑望し、欧米に肩を並べる東亜圏を打ち立てることで西方の干渉・支配を撥ね退け、新たに世界秩序の再構築を目指した。大政翼賛運動は、経済・文化・生活など各方面に及び、自給自足の東亜共栄圏の建設を企図し、内に対する民族精神の奮起、外に対する大東亜文化の宣伝という二つの方向からの新日本文化の発揚を謳った。忠孝一本、国民ことごとく一家族の成員として、国家のため新体制樹立に努めよ、との号令が発せられたのである。「文化新体制基本方針」は、次のように言明している。

一、国防国家体制に即応し、世界文化の母胎たる新国民文化の創造育成を期す。

一、日本文化の伝統を高揚しつつ、他民族文化の長所を撰取し、以て東亜広域新文化の樹立を期す。

「大政翼賛運動」による地方文化の新建設は、蕭然としていた台湾文学活動を甦らせる契機となった。この転機は、主に二方面から訪れた。一方は、翼賛運動で強調された「国防国家」の理念である。統治当局は文化の政治的効用を重視しはじめ、植民地の「人的」資源の動員を目的に、これまでの文化抑圧政策に修正を加えたのである。もう一方は、大政翼賛会文化部による「地方文化」と「外地文化」の提唱である。これにより、間接的に植民地の文化が重視されることとなり、台湾作家は「地方文化」の影響を受け再び台湾文壇上に活躍の場を得、これによって、在

台日本人作家に対抗する舞台を持ったのである。台湾の日本人作家の刊行物『文芸台湾』が一九四〇年に創刊された後、張文環の奔走が実り、一九四一年五月に『台湾文学』が創刊された。『台湾文学』創刊の契機もまた、外地文化ブームであった。そのブームの裏には、当然ながら帝国による動員という政治的意図が隠されていた。植民地政府は、文化動員さえ順調であれば宣伝戦上で十分な効果が得られ、戦況がさらに緊迫したときにも、台湾という植民地の経済および人的資源を簡単に掌握し利用できると考えたのである。

一九四一年一二月に「大東亜戦争」が勃発し、戦況は新たな段階に突入した。日本による真珠湾の奇襲攻撃、米英に対する宣戦布告が、第二次世界大戦の序章となった。この時期、日本政府が掲げる戦争の旗印は、アジアの正義の維持から東亜共栄・近代の超克へと拡張され、アジアの総力を動員して米英に対抗しようとした。一九四一年一二月八日、日本は正式に西方勢力を代表するイギリス・アメリカに宣戦を布告した。宣戦の大詔は、東アジアの平和の重要性と、日本の平和維持に対する努力が繰り返し強調され、全面的に米英へ対抗する覚悟を示している。その文を貫いているのは、戦時期の日本社会に普遍的であった「近代の超克」思想である。宣戦の大詔が発せられると、日本は東アジアの平和を維持するという大義名分の下、アジア

に総動員をかけ、さらに国民ごとく一家族の思想を、国家に忠誠を尽くすための基本概念とした。帝国は植民地において、日中の仲介役を務める才を備えた知識人を効果的に育成し、政策に協力させた。また日本内地においては、徳富蘇峰などの文化人や政治家が、帝国神話の創造に力を奮った。彼らは日本を神格化して「大日本は神の国なり」と公言し、日本神国論を唱えた。この神国論は、神話伝承を織り交ぜ、国民・国家の成り立ちを主軸に皇国至上論を構築した。国民・国家意識の育成および忠孝一体論が唱えられるなか、台湾知識人もまた、植民地の民衆を動員するために土地の文化人としての影響力を必要とされ、皇民として神国論の論述に参与しなければならなかった。しかし、皇民化運動下で発言空間が緊縮されていたとはいえ、大政翼賛会の文化政策における外地文化重視論を受け、地方文化・外地文化を紹介し発表する場を得たことで、台湾文壇に新たな窓が開かれた。

張文環は、大政翼賛会成立後の台湾文壇に期待を寄せた。

日本は今戦争をしてゐる。従つてこの興亜の大業のもとに、当然中央文壇も今迄の様な局限的なものではなく、もつと文壇を拡張する意味で、中央の空気が自然と地方的なものを取り入れるやうになつてきたのではないかとかんじられるが、(中略)ただ台湾文学も

この中央的な空気に動かされて、胎動しつつあることは喜ばしいことである。これはたしかに一つの転期になるだらうと思ふのである。⁽³⁰⁾

外地文化に注目が集まることで外地文化論が盛んに唱えられ、台湾文学が再び興隆したこのときを、張文環は文壇の転換期とみた。その他の島内の知識人たちも陸統と文壇に参入し、『台湾文芸』・『台湾新文学』といった戦前の台湾文学の成果を受け継ぎ、戦時期の文芸活動は再び活気を取り戻した。「地方文化振興」事業は、戦争によって頓挫していた、台湾文化を主軸にした作品を引き続き創作することを可能にした。この時期、台湾の作家は、台湾文化を創作の出発点とすることで、総督府の政策に違反しない中間地点を見出すことができたのである。

東亜共栄というスローガンの下、台湾文学は中央文壇への進出を期待され、大東亜文化圏の文学史の一翼を担う存在となった。地方文化の振興という、植民者・植民地双方に利のある政策は、植民地作家にとって大きな意味があった。植民地作家は、地方文化を創作の材料にすることで、政局に協力しながらも、台湾文壇を発展させることが可能となった。また植民者は、地方文化振興を日台融和のシンボルとすることで、台湾知識人たちの反発を招くことなく動員政策を推し進め、帝国の見せ掛けの共栄を創り上げることに成功したのである。

三 文芸翼賛の体制化 ——統合機関の改組と成立——

翼賛会による地方文化振興の提唱を契機に、台湾は外地の協力者として総督府にその存在を認められた。台湾における総督府の文学動員政策の方針からみると、その動員過程は相当な組織性を備えていた。抽象的な精神動員を呼びかける一方で、関連する動員組織を設置し、文化翼賛を体制化へと推し進めた。台湾社会の戦時動員体制は、大きく三段階に分けられる。第一段階は、一九三一年の満州事変からはじまる。台湾の政治運動は圧迫されたが、この時期はなお、台湾知識人の発言の場が保たれていた。第二段階は、一九三七年の日中戦争勃発からである。漢民族である台湾人にとっては、状況が最も悪化した時期である。この時期、台湾知識人の間に「祖国」への同情が広がるのを押さえるため、「母国」は彼らに、国家へより一層の忠誠を尽くすことを要求した。第三段階は、一九四一年の「大東亜戦争」勃発からである。総決起のスローガンの下、台湾知識分子は選択の余地もなく、政府から戦争協力を迫られた。⁽³¹⁾戦時下の総督府の文芸統合機構を台湾知識分子との関係からみると、知識分子と総督府の政策は互いに影響し合っていることがみてとれる。また統合機関の確立過程に

は、植民地知識人の「翼賛」の軌跡をみることができ、組織化・系統化された動員政策から戦時期の知識人の「共栄」への参与過程を解読することができる。

一九三八年、日本政府は「国家総動員法」を公布し、正式に戦時体制を発動した。「国家総動員法」は、戦時統制法規の集大成といえる。この動員法の成立は台湾社会の行政組織にも影響し、一九三七年、台湾総督府は日中戦争の情勢に対応するため臨時情報委員会を組織し、同年の八月には、総督官房の下部に情報の収集と宣伝工作を担当する「臨時情報部」を設けた。その後、それだけでは膨大な業務に対応できなくなり、一九四二年一月に臨時情報部を廃止し、正式に「総督官房情報課」を設立した。情報部門の設置以外に、総督府内部の組織系統も改正され、一九三八年には調査業務を行っていた官房調査課が台湾総督官房企画部に改組され、主に各部門の動員事業を担当した。また一九四一年には官房企画部がさらに企画・物資・労務・統計の四課を増設し、各動員業務を取り仕切った。一九四二年にも、官房企画部が組織の再編を行い、総務部を増設してその下部に総務・物資・動員・労政などの課を設けた。この改組は、動員業務を一元化して管理することを主要な目的としていたが、また一方では、南進政策の影響による総督府の人員不足に対処し、組織を簡素化するためでもあった。大東亜戦争勃発後、総督府は島内外の戦備を整え

るために、労力動員組織を再編した。一九四三年一二月、総督府は鉱工局の下部に国民動員課を設置した。各州の総務部にも国民動員課を置き、また各庁、各市・郡にも国民総動員課、または国民総動員係を設けた。総督府の内部組織の再編は以上のようなものであったが、なかでも台湾文学界と密接に関係したのが、一九四一年四月一九日に成立した皇民奉公会である。大政翼賛会成立から二か月後の一九四〇年一月二六日、総督府の後援により日本文芸家協会が主催する「文芸銃後運動講演会」が行われ、内地から吉川英治・菊池寛・久米正雄・中野実・火野葦平が台湾に派遣され、巡回講演を行った。講演活動は、一六日から二三日まで台湾全省で展開され、『台湾日日新報』による「盛況」の報道が、熱狂的に戦争協力気分をおおった。

日本内地に同年成立した「日本文芸中央会」に呼応し、新たな「文芸家協会」が翌年二月、正式に成立し、民間団体から半官半民の文芸団体へとその性質を変えた。この半官半民団体が組成された際の台湾文芸圏の変化は、注目に値する。文芸家協会の改組後三か月のうちに、張文環の主導で台湾人が中心となって組織する文芸団体「台湾文学」が成立したのである。西川満をはじめとした日本文学者が内地文壇の気風に触発されて設立した台湾文化人の文芸組織「台湾文芸家協会」は、別の文芸団体「啓文社」が成立すると内部分裂し、互いに対立していた。両団体ともに

台湾人作家と日本人作家が入り混じっていたが、日本人作家を中心とする台湾文芸家協会と台湾人を中心とする啓文社とは、文芸路線に差異が生じ、別の道を歩み始めたのである。菊池寛などによる巡回講演の後、日本人作家たちは再度台湾の文芸化団体を統合しようと考えていたようだが、台湾人作家が新たな団体「台湾文学」を立ち上げたことで、その目論みははずれた。

総督府が政府当局の改組を進めるなかで、台湾の大政翼賛会といわれる「皇民奉公会」が成立し、台湾総督の長谷川清が総裁を、大澤貞吉が宣伝部長を務め、台湾の新体制が確立した。皇民奉公会の主な働きは、大政翼賛会の精神を汲み、台湾において高度な国防国家体制を確立し、さらに東亜共栄圏の建設を目指す国民的運動を展開することであった。皇民奉公会は台湾全島を一元化して統制する組織としての役割を期待されたが、皇民奉公会の成立はまた、皇民化運動を牽引する機関の誕生でもあった。当時、台湾総督府警察沿革誌の編纂を嘱託された鷲巣敦哉は、一九四一年に小冊子『台湾保甲皇民化読本』を執筆し、そのなかで、皇民奉公運動を鼓吹し奉公の現状と未来の方向性を述べた。

今や新体制のかけ声のもとに、政治、経済、文化等のあらゆる方面に、あらゆる階級の人々が、国家第一主義の旗幟の下に極めて大きな働きをなさんとしつつ

あります。(中略)今は、天が、本島の新附民に、果してこの好機会に、真に立派な日本帝国臣民となり得るや否やについて試験をしてゐるとも考へられるのであります。故に本島人の方々は、日本の国民として、自分たちの現状を一度も二度も見直して、内地の人々や朝鮮の人々と共に、一億同胞が一体となつて立ち上り、進んで、聖業をお扶けする覚悟を起すことが必要であります。

皇民奉公会の規約と実践要綱、そしてこの『台湾保甲皇民化読本』からは、総督府の政策実行の経緯がみてとれる。各組織の設置は、植民地島民に国家観・皇国観を植え付けるためのものであり、一九三七年以降の「皇民化運動」は加速した同化運動であった。日本が台湾占領以来進めていた同化運動は、日中戦争開戦後から加速的に激化した。これはつまり、日本の構想した「東亜共栄圏」とは、民衆すべてが日本皇民であることを前提とするものであったことを示している。いわゆる内台一体・東亜融和論は、日本が積極的に推し進めてきた「皇民養成」のための皇民化運動と並べてみることで、かえって「大東亜共栄」の矛盾を浮き彫りにしたのである。体制と政策の矛盾は、日本が大東亜共栄を掲げる上での大きな内憂であった。

皇民奉公会は、台湾の体制翼賛運動の中心組織とみなされてきたが、体制翼賛会の台湾支部というわけではなく、

独立性を有していた。主に台湾を優良な南進基地とするために活動し、皇民奉公運動を全島臣民の実践運動に位置づけた。機関紙『新建設』創刊号の巻頭あいさつ「世界戦争と新建設」は、次のように明言する。

大東亜戦争このかた、台湾の重要性は急速に加はつて来た。大東亜の中心地点は実に我が台湾であるとも云はれてゐる。行政方面ではすでに内外地一体の大東亜省的理念が我等の足もとにまで波打つてゐる。誠に聖代の恵沢と云はねばならぬ。これに対し、地元六百萬皇民は、如何なる感激を以てこの聖恩に応へ奉らうとするのか。

大東亜戦争勃発後、当局の奉公への要求は過酷さを増し、全島の翼賛気分の下、皇民奉公会は一九四二年八月一日に再び改組された。その改組により、地方支部が廃され、「民衆娯楽の普及」と「文化レベルの引き上げ」を担う文化機関である「文化部」が新設された。文化部設置の主要な目的は、知識人に奉公への協力を要求し、知識人の能力を借りて島民を動員し、島民の奉公意識を強化することであった。言い換えれば、島内知識人の社会的影響力に着目し、「共栄圏」を作り上げる際には、島内の指導権を掌握し、植民母国の事情にも通じているバイリンガルの知識人を利用しようとしたのである。それゆえ、知識人と体制の関係もまた、注目すべきものである。同年八月一七日

の『興南新聞』には、台北帝国大総長安藤正次の発言「皇奉文化部に期待」が掲載された。

皇民奉公運動としての文化部の仕事といふものはこれらの各々のものをして奉公の一路に向はしめるといふことが大いなる仕事であると思ふ、がしかし奉公の一路に向はしめると言つても戦争の場面に題裁をとつたもののみが必ずしも奉公的の文学であつてはいけな、同じやうに統制経済の必要を唱つた歌のみが奉公の歌とは言へない、本當の日本的の伝統に根ざした文化的な役割なるものが基調とならなければならぬ。

翼賛組織の主要な一環としての皇民奉公会が「文化部」を増設した後、翼賛組織全体もまた、大まかに形を整えた。文化部長には『興南新聞』編集長林呈禄が任じられ、また台北帝国大学教授で詩人の矢野峰人と総督府図書館長の山中樵が参事に起用された。實際上、文化部の事業は「台湾文芸家協会」と「啓文社」の文学者たちとも密接なつながりを持つていた。矢野峰人は「台湾文学の黎明」という一文のなかでも、皇民奉公会文化部文芸班と台湾文芸協会が協力提携して活動を展開し、緊密に連絡しあうことが重要であると述べている。

一九四二年五月二六日、情報局と大政翼賛会の主導により、日本内地の文学者を一元化した「日本文学報国会」が成立し、これに刺激を受けた文芸家協会は、一九四二年七

月に再度の改組を行った。會長の矢野峰人は、事前に会員たちへ以下のような文書を発している。

本協会成立以来一年有余を経過致候が此間大東亜戦争敢行の機に会し文芸奉公活動の更に一段と促進すべき時期なる事を痛感致居候処内地に於ては従來の行懸りを解消して日本文学報国会結成の事有之時局の進展に鑑み本協会も各部門の活動を強化し至誠協力以て國家の要請に應ふるの決意を新に致すべく茲に發展的改組を断行致す事と相成候就而貴下の御協力に俟つ所多く別紙改正規約相添へ会員として御參加の程御招請申候上。

改組にあたって、松居桃楼・竹村猛・張文環・陳逢源の四名を新たに理事へと任命し、また「台湾文学」の同志と各地方の作家を一律に会員とした。この改組が、後に成立する「台湾文学奉公会」の前身になったといえる。新協会はずでに、全島にわたる文壇統合体系の雛形を有していた。

この改組により、台湾文芸は新たな方向性を付与され、奉公路線を進み始めた。一九四一年四月一〇日、日本文学報国会は、台湾総督府情報部と皇民奉公会の支持を得て、「日本文学報国会台湾支部」を設立した。支部長を矢野峰人が務め、幹部一名には張文環と龍瑛宗も名を連ねた。戦争の激化にともなうて文学奉公への期待と要求はさらに

高まり、一九四三年四月二九日に、皇民奉公会は全島規模を誇った「文芸家協会」を解散させ、文学者を「台湾文学奉公会」の下に参集させた。すべての文芸活動は、台湾文学奉公会の指揮によって行われ、文学者たちは一元化された組織体系に組み込まれた。大東亜戦争の決戦期には、「台湾文学奉公会」と「日本文学報国会台湾支部」は相互に連携し、共同で日本皇国精神の宣揚と、台湾皇民文学の創作推進にあたった。

四 文芸協力の具体化

——文学者大会・文学賞・文芸講演——

上述した、統合的な奉公機関の設立と改組を経て、総督府と日本政府も積極的にさまざまな文化翼賛活動を展開し始め、戦時文芸体制の確立を援けた。戦時動員体制下の文化宣伝は、いくつかの項目に分けられる。まずは、文学者大会の招集である。日本文学報国会は情報局の指導で多くの協力活動を実行したが、その一つが三回にわたる大東亜文学者大会の開催である。これは日本勢力下にある各地域を代表する文学者を集結させる活動であり、統合の形式上重大な意義があった。戦時文芸体制の、具体的な成果の一つといえよう。一九四二年八月に文学報国会が編纂を行った『文芸年鑑』に、「大東亜文学者大会」の記録がみえる。

本大会の企てが日本文学報国会に於いて取り上げられたのはその設立の直後であつた。大東亜戦争のもと文化の建設という共通の任務を負う共栄圏各地の文学者が一堂に会し共にその抱負を分かち互いに胸襟を開いて語ろうというのがこの大会の趣旨である。

この企てが伝えられるや会員は勿論、交友団体、関係官庁の絶大なる賛同と支持を得て、文学報国会では共栄圏各地の事情に精通した人々を準備委員に委嘱して具体策にとりかかつたのである。

この大会の準備報告から、戦争はすでに政治・経済のみならず、国家の力量を総動員した総力戦へと突入した状態であつたことがわかる。この大会の招集は、日本文学報国会の結成からまもなく行われたが、それは日本文壇が一元化の再編を完成させたばかりのころでもあつた。文学者統合機関の成立後すぐに、いわゆる「大東亜」文学者の大会の招集準備に取りかかつたのである。大東亜文学者大会の開催は、日本の情報局が島内およびその他共栄圏内の文化人を直接的に動員できる手段であり、この上から下への押し付けにより、各地の文化人は、帝国の文化政策執行の道具となつた。第一回の大会準備会議は一九四二年七月二一日、第二回は同年八月一八日に行われ、その間に、大会の名称は「皇国文化宣揚大東亜文学者会議」から、政治的ニュアンスの比較的小ない「大東亜文学者大会」へと改め

られた。

第一次大東亜文学者大会は、日本文学報国会の主催、情報局・陸軍省・海軍省・外務省・鉄道省・文部省・大東亜省・大政翼賛会の協賛により、一九四二年一月三日から一〇日まで東京・大阪で開かれた。東京・丸の内の帝国劇場での開幕式の後、会議は三・四日の日程で、同じく丸の内の大東亜会館で行われた。出席者は、日本（台湾と朝鮮を含む）・満州・蒙古・中国それぞれの代表あわせて一五二名で、台湾からの出席者は、西川満・濱田隼雄・龍瑛宗・張文環の四名であつた。この会議では、宣伝戦展開のための、大東亜文学の概念が打ち立てられた。この大東亜大会は、日本が大東亜共栄圏の建設を謳つて以来、はじめて文人を大集結させた会議であり、台湾文壇も期待を持ってこれを迎えた。楊逵は『台湾時報』に、大東亜文学者大会の開催について以下のような文を寄せている。

十一月三日から東京に於て大東亜文学者会議が行はれることになつた。この空前の企てに対して、吾々は萬腔の期待をもつのである。単に大東亜の文学者を一堂に集めるといふだけの事実をもつてしても、これは有意義である。（中略）共存共栄を目指すところの今吾々の理想は別であるが、しかし、昔から政治に関する限り、誰でもが見逃すことの出来ないものは支配と被支配といふ隠れなき事実であつた。その支配形態に

於て、千差萬別はあつても、その底を流れるところの本質的なものは、多くの場合一心同体でも共存共栄でもなかつたと言ふことを見逃すことは出来なかつた。

東亜共存共栄を目論む日本はこうあつてはならないのであり、一つの新しい形態を創造しなければならぬのである。(中略)大東亜共栄圏建設は、文学者がその一半を背負はなければならぬ。各民族、各地方の文学者が一堂に集つて、ざつくばらんに話し合ひ、憐びんと信頼の感情をもつて結び合はされた時、その時にこそ大東亜数億の人間が一心同体たり得るのである。

楊逵は戦時期の状況ゆえにしばらく筆を置いていたが、この発言では、政治上の支配と被支配の問題に関して、一貫して階級的な思考を持ちつつも、支配問題という大東亜共栄圏の盲点を挙げ、統治者が支配を超越した真の共栄に到達するような新たな形態を築きあげることに期待を寄せている。また楊逵は文中で、福田清人が『時局雑誌』一〇月号に発表した「大東亜文学者大会を談ず」に異議を唱えしめるため、全アジアの先頭に立つ使命を負つており、共栄圏の文学者を指導し、思想とペンの力を用いてアジアの民心を鼓舞するべきだ、と強調する論に対し、楊逵は、日本の真面目を各地の人民に知らしめることが大会の主要任務のひとつではあるが、もっとも重要なのは文学者自身に

各地の民衆の心情を率直に表現させることである、と主張した。文学者が各地の喜怒哀楽の真実を描き出すことで、日本一億の民は各地の民衆と喜びや悲しみを共有でき、こうあつてはじめて彼らの援助協力を得られるのであり、これこそ大東亜を建設するために必要不可欠な要素である、と述べた楊逵は、また次のようにいう。「大東亜幾億の人間が、一人残らず心からやらして呉と言つて来た時、それがどんなにすばらしいものであるかを吾々は心得なければならぬ」。

楊逵の発言は、重要な議題を提出している。文学者のさまざまな活動への参与は、戦争勃発後から戦時体制の確立まで常に「強迫」の影があり、自発的なものではない。大東亜という新形態を成功に導くにあたって、これは軽視できない点であつた。楊逵はまた、日本文学報国会のなかに東亜部を設立すること、中国文学者の作品を翻訳して日本国内の雑誌上に掲載し、原稿料を支給すること、文学者が外地に派遣された官僚・軍隊に協力すること、などを含む片岡鉄平の東亜文芸復興についての見解に賛同の意を表した。楊逵は、日本翼賛運動が皇国思想と皇国精神の輸出の一方のみに偏り、共栄圏各地からの文化輸入をなおざりにしている状況について、これでは外地人が日本を理解しても日本内地の人民は外地を理解しえず、互いの衝突を避け矛盾をなくすことはできないと指摘したのである。楊逵

が大東亜大会の開催に寄せた期待は、各植民地の知識人の期待でもあり、彼らは出席した代表が、大会で存分に自身の文化を表現してくれることに期待した。この大会は文学者の集結を通して、次の二つの議題を強調するものであった。一つは大東亜精神の樹立、また一つは、文学者ほどのように大東亜戦争を戦うべきか、というものである。大会の目的は、大東亜のイメージを確立させることであつたといえるだろう。春山行夫は、植民地文学者の大会参加について、以下のように言及している。

なほ大会には、朝鮮、台湾からの代表者も参加されている。日本の文学界に、朝鮮、台湾の文学界が含まれてきたといふことは、それからの地域の文学がある高さに達したといふ表示以外に、現代の日本文学の規模がそこまで拡大されてゆかねば本当でないといふことをも意味している、大東亜共栄圏の文学全体が、同一の立脚点、水準に進まねばならないといふ目標から見れば、当然すぎるほど当然の発展であるが、いままでの日本の文学界の歩みから見ると、画期的な基調の拡大である。日頃、かうした日の早からんことを念願してきた一人として、両地の文学建設に貢献せられた代表者に対しても、衷心からの拍手をおくりたい。

大会参加地区のうち、台湾・朝鮮は他の地区と立場を異にしていて、新たに日本国民に加わった植民地台湾・朝鮮

は、統治者にとつてみれば、直接的に大東亜建設へ協力させることができる地区である。台湾の代表者は、龍瑛宗が「皇軍に感謝」、西川満が「日本語の普及」、濱田隼雄が「次期大会を台湾で」、張文環が「従軍作家に感謝」という発言をそれぞれ行つた。龍瑛宗はその発言で、日本が米英文化を打倒しうる大東亜文化会議を開催したことに対し、深く感謝の意を表した。また、大東亜精神とは日本を中心とする大東亜の同胞が共に楽しみ共に喜ぶことであると述べ、民族間の交流に力を尽くし、心と心を通わせる友好関係を促進するのが文学者としての務めであるという考えを示した。西川満は、言語面から大東亜精神・八紘一字の日本文化の精髓を真に体得できるとした。また、支那事変以来の日本語の急速な普及、大東亜戦争後のさらなる進展に触れ、日本語養成の重要性を主張した。濱田は次期大会の開催地について、大東亜共栄の角度から台湾で行うべきであると提議した。その理由として、台湾は本島人・高砂族・日本人といった多民族が社会を形成していること、また帝国の南進の基地として先鋒を担う地の利があることを挙げてゐる。張文環の発言は、身を挺して南方に赴く従軍作家に関心を注ぎ、真先に東亜共栄圏に進出し、新東亜文化建設を援助する作家たちに感謝を述べている。

四名の代表者の帰台後、皇民奉公会は、大会出席者の文

学経験を台湾文化人と共有させるため、「大東亜文芸講演会」の開催を計画した。『文芸台湾』五卷三号は「大東亜文学者大会特集」を組み、矢野峰人・西川満・龍瑛宗・張文環・濱田隼雄の発言のほか、新垣宏一が歓迎の詩を掲載し、あわせて「大東亜文芸講演会」の全島での開催を告知した。『台湾文学』三卷一号にも大東亜大会に関する記事と、四名の出席者の感想が載せられた。濱田隼雄は「大東亜文学者大会」の成果」のなかで、今回の大東亜文学者大会は大東亜戦争の戦績の一つであるという確信を語り、大東亜戦争を偉大な事業と称賛している。濱田は、「大東亜戦争こそは文学を理解してゐる。その要求はいささかの無理もなく、よく考へてみれば、ただ文学の正道に還ることを求めてゐるのである」とし、自身を含む大会出席者の今後の任務について、以下のように述べた。「台湾の文学が今にして現状を反省し、正道に立たずんば、大東亜文学の中から台湾文学の名が抹殺されるであらう。然し私は悲観する者ではない。大会によつて我々の目標は定つた。確かに従来狭く島内に閉ぢこもつて、全日本文学の一環としての批判の埒外に安住した台湾の文学である。そして今や全大東亜文学者の峻厳な批判の下にある文学である。けれども、その台湾文学が今次大会の真義を正しく理解する時、目標はあまりにも明確なのである」。西川満も、『新建設』一九四三年一月号に発表した「隣組にも文学を」と題

する文章で、文学者大会について触れ、大会は民族の結合、心の交流であつたと語っている。西川はまた、思想戦士の一員として、文学を皇民奉公の第一線に押し上げるため毅然と事に当たるといふ決意を表明し、本来国民が身に普及させたい、と述べている。注目すべきは、張文環の發表した『内地より帰りて』である。張は、自身が大会に参加せねばならないことで感じた気詰まりと緊張を回想し、最後に一〇月二二日に東京へ赴いてから、一月二三日に台湾へ帰るまで一日の休息もなく、ついに新竹での講演会の際に病気で倒れてしまつたと告白している。この記事からは、文学者の先鋒として派遣され、翼賛への参与を要求された張文環や同様に動員された植民地知識分子の哀れさと、遣る方のない苦悩を読み取ることができる。実際、戦時体制のなかで発言権を得るために、植民地の知識分子は矛盾した心理を抱えていた。台湾文学の発展としかるべき地位の獲得を願ひ統治者に期待する反面、動員へ過度に参加すれば「御用文人」のレッテルをはられるかもしれないと恐れを抱く。張文環の曖昧性について、筆者はこのような点から解釈できると考える。

第二回文学者大会は「大東亜文学者決戦會議」と銘打たれ、一九四三年八月二五日から三日にわたつて、東京で開かれた。このとき、台湾から代表として参加したのは、長

崎浩・斉藤勇・楊雲萍・周金波であった。参会した文学者は、全体で一二五名にのぼった。吉川英治が大会の宣誓文を朗読し、会議の目的を明らかにした。宣誓文は、大東亜の決戦の日が訪れたと宣言し、文学者たちに、勇猛な心を奮い起こし米英文化を滅ぼす最後の一鎚を振るえ、と呼びかけた。八月二〇日の『文学報国』には、第二回東亜文学者大会の特集が組まれ、第二回大会開催の趣旨が説明された。

大東亜戦争の戦況今や白熱化し、その完遂のため共栄圏内の決戦態勢は既に完備せるも、その強化は焦眉の急を要するものあり、ここに大東亜地域諸国の文学者を招請、互いに文化的協力の意志を確保するにとまらず、眼前の決戦に勝抜く決意並に実践方策を胸襟を開いて論議談合し、同時に見学其他の方法によりわが国の真姿を顕示し以て共栄圏諸国文化人の挺身協力を促進せんことを期す。

この大会は目前に迫った決戦期に呼応したもので、その議題は決戦精神の高揚・米英文化撃滅・共栄圏文化確立とその実践方法であった。主題の大枠は第一回大会と変わらず、第二回大会はその延長ともいえるものであり、ゆえに第一回での総結成の期待と盛況には及ばないところがあつた。しかし、一九四三年八月号の『朝日新聞』も、この第二回文学者大会を特集している。第三回文学者大会は「南

京大会」と題され、一九四四年一月一二日から一四日まで南京で開催された。日本からは一四名、中国からは、華北・華中の代表をあわせて四六名、満州国からは八名がそれぞれ出席したが、植民地の朝鮮と台湾からの出席者はなかつた。一九四四年七月、サイパン島の日本軍が玉碎したことで、東条英機内閣は総辞職を余儀なくされた。同年一〇月に、日本は神風特攻隊による攻撃を開始する。特攻隊は敗色が濃厚になるなかで考案された最終兵器であり、日本が大東亜戦争で行った最も非人道的な攻撃方法である。このような状況下で招集された文学者大会は、当然ながら相当重苦しい雰囲気が漂っていた。第三回文学者大会の宣言は、梅娘と火野葦平によって朗読された。米英の空襲を避けながら行われた第三回大会であつたが、この大会では以下の三つの宣言が提出された。

一、吾等は大東亜共栄圏内各民族の文化を高め、且つ其の大調和の達成に貢献せんことを期す。

二、吾等は大東亜共栄圏内各民族の卓抜なる精神を凝集し、相互に補益し、以て大東亜建設の共通目標に邁進せんことを期す。

三、大東亜共栄圏内各民族の歴史と伝統を尊重し、大東亜民族精神の昂揚を期す。

三度にわたる文学者大会の開催は、まず地方的な「皇民文学」を日本の大東亜建設の協力体制全体の上に拡大し、

「大東亜文学圈」の一部分として組織される文学事業にすることであり、さらに各地の文芸宣伝政策の進行程度を確認し、組織的に文学者を指導者へと養成し、各植民地あるいは占領区で総動員の宣伝工作を行わせるためであった。

そのほか、台湾文化界に影響を与えた事業には、一九四三年一月一日に台北公会堂で行われた「第一回台湾決戦文学会議」がある。台湾文学奉公会の主催、総督府情報課・皇民奉公会中央本部・日本文学報国会の協賛で、全島から六〇名の文学者が参加した。「文芸台湾」と『台湾文学』は、どちらも多くの誌面を割いて会議の様態を伝えている。戦争への協力という文学の任務は、このときすでに共通認識となっており、会議の重点は翼賛の宣伝ではなく、いかなる方法で戦争に呼応するべきか、という問題に置かれた。

会議では、皇民奉公会会長の山本真六が真先に発言を行い、後方の任務は生産を拡大し戦力を増強させることであると述べた。これは増産報国を強調した翼賛政策だが、山本はまた思想戦にも言及し、文人はおのおの国民の精神戦力を引き上げるといふ重大な責任を負っていると強調した。大東亜戦争は大日本精神の米英物質万能主義への宣戦布告であり、ゆえに皇国民民として、偉大な大和魂を発揚し、文学報国に全身全霊をかけるべきである、という山本の発言に続いて、皇民奉公会の宣伝部長大澤貞吉も、次の

ように呼びかけた。「文学者は今こそ国家の要請に応へ小さき己をみがきつづけ、一國一党の主を気取らず、殻にこもらずに構想雄大な文学を創造せられたい」。この会議は、第二回文学者大会に呼応して開催されたといえる。大会の主題は、

一、本島文学の決戦情勢

二、文学者はどのように戦争に協力するか（理念と実務）

であった。「決意文」は、次のようにいう。

（前略）我等は大東亜戦争の完遂に筆を剣として蹴起せる戦士なり、我等血盟の同志は皇道精神の真髓に立ち文学経国の大志を奉行し如何なる障害をも破推して台湾文学の建設に全力を結集せむ。

この会議で、日・台の文学者はそれぞれ異なった翼賛の姿勢をみせた。会議上で西川満は、東亜の和睦は形式上のみにとどまらず、かえってそれを否定するべきであると訴え、すでに会議で提議されていた「文芸雑誌の戦闘配置」に力強く賛同を示した。その戦闘配置のために、文芸台湾社の同志は「文芸台湾」を献上することで同意しており、また斎藤勇は短歌雑誌「台湾」を、田淵武吉も雑誌「原生林」を捧げる用意があることを表明した。しかし黄得時は、雑誌を統合する必要はないとの見解を示し、広告は多いほど衆人の目を引くのであって雑誌もまた多いほどよい

と主張した。この発言に対して濱田隼雄は、経済管制と文化統合を混同するものであると激しく攻撃した。このとき、楊逵は黄の意見に賛成し、抽象的な皇民文学理論と雑誌統合はまったく別の問題であるとの考えを表明した。双方が対立状態になったところで、張文環が弁解の言葉を述べた。

台湾には非皇民文学はありません。若し仮に非皇民文学を書く奴が居れば須らく銃殺に処すべきである。

張文環の熱を込めた弁解を最後に、議長はひとまずこの議論を打ち切った。皇民文学の創作についての討論以外にも、台湾本島の知識分子は優れた意見を提出している。例えば楊雲萍は、台湾文学史の編纂を提案した。楊は、大東亜文学史の一環としての台湾文学史を早急に整理する必要があると強調した。もしこの提議が実現していれば、台湾文学発展の大きな力になったことだろう。

「第一回台湾決戦文学会議」に次いで影響の大きかったものは、各地で行われた文芸座談会・講演会である。一九四〇年一月二日、日本文芸家協会の派遣した菊池寛・久米正雄・火野葦平・吉川英治・中野実などの作家が台湾を訪れ、総督府の後援により台北公会堂で「文芸戦後運動講演会」を挙行し、また島内の主要都市でも講演を行った。講演の主な内容はやはり、文学者はいかにして宣伝戦に協力すべきかという部分に重点が置かれていた。翌一七

日の『台湾日日新報』は、作家たちの台湾訪問講演の「盛況」ぶりを伝えた。この講演会によってもまた、日本内地の戦時期文芸理念が直接台湾に申し送られ、台湾知識分子との間にもさらなる呼応関係が生まれた。そのほかには、一九四二年一月二日、台湾文芸家協会の主催、皇民奉公会の協賛により、第一回大東亜文学者大会に出席した四名の台湾代表を中心に、台北公会堂で「大東亜文芸講演会」が開催された。はじめに協会会長の矢野峰人があいさつし、続いて四名の台湾代表が講演を行った。講演題目は順に、濱田隼雄「大東亜文学者大会の成果」、張文環「台湾文学の新たな始まり」、龍瑛宗「大会参加の感激」、西川満「文学もまた戦争」で、新垣宏一と長崎浩による詩の朗誦も披露された。一月二日に高雄、一三日に台南、一四日に嘉義、一五日に台中、一六日に彰化、一七日に新竹と、一週間かけての全島巡回が決定され、文芸報国を鼓吹した。

一九四三年二月、日本文学報国会事業部長の戸川貞雄は、丹羽文雄・庄司総一と共に台湾を訪れ、「文学報国会」台湾支部の立ち上げに着手した。二月二日には、日本文学報国会と皇民奉公会台北市支会が共同で「文学報国講演会」を挙行した。講演題目はそれぞれ、「文学報国運動の現状と覚悟」・「ソロモン海戦への従軍」・「文化について」であり、そのなかでも丹羽文雄の「ソロモン海戦への

従軍」は全島に放送された。戸川・丹羽・庄司の「文学報
国講演会」もまた全島巡回講演の方式で皇国翼賛を宣伝
し、新竹・台中・台南・高雄・台東・花蓮などを前後して
巡った。名義上は「文学報国会」が台湾に支部を立ち上げ
たことになっていたが、実際上は、重要な文芸戦略はすべ
て台湾文学奉公会の主導で決定されており、「文学報国
会」は形式的な存在にすぎなかった。その主な理由とし
て、総督府主導の台湾文学奉公会と日本文学報国会台湾支
部の構成員は重複しており、報国会台湾支部は日本内地と
協調し共同戦線を張るために成立したもので、実際の植民
地の文学奉公活動は台湾文学奉公会が統一的に計画執行し
ていたことが挙げられる。その他の小規模な座談会には、
一九四三年三月の『文芸台湾』に掲載された「台南地方文
学座談会——於台南市四春園」などがある。この座談会は
主に、台南に居を構えていた河野慶彦・大河原光廣と台北
の新垣宏一、東京の日野原康史の四名によって進められ、
文学の動向および今後の実践要綱についての議論が交わさ
れるとともに、台南の文芸状況と地方文学者の問題につい
ても話し合われた。

翼賛体制を具体化したもう一つの政策は、文化賞・文学
賞の設立である。皇民奉公会文化部は台湾文学賞を設立
し、芸術・音楽・演劇の三部門で、台湾文化の向上に功績
のあった文化人および文化機関を表彰した。台湾文化賞の

設置は、文化人・文化機関を刺激して国民精神を高揚さ
せ、奉公の実践活動を展開することを主な目的としてい
た。皇民奉公会主催の第一回台湾文化賞における文学賞
は、総督府が一九四三年に新たに設けた文化賞のなかの一
項目、その文学類の小説部門賞にあたり、二月六日、大東
亜文学者大会に参加した西川満・濱田隼雄・張文環の三名
が、それぞれ「赤崁記」・「南方移民村」・「夜猿」で受賞し
た。角行兵衛は、台湾文学賞の意義と役割について、以下
のように述べる。

しかもこの授与詮衡の意義は単に「一応の過去の功
績を顕彰し、この榮譽を契機として受賞者がいよいよ
新なる決意を以つて奉公の至誠を發揮せん」一事を期待
すべく文化人又は文化機関中より該当者を詮衡する事
のみで終るのではない。詮衡の理念は台湾文学の進む
べき方途を指示し、本島の文学人に激励と鼓舞のみな
らず進路をも指導し、又全文化人並に全読者大衆に批
判と鑑賞の基準を提示するのである。(中略) 決戦下
台湾の推進尖兵たる皇民奉公会が、台湾文化を如何な
る方向に推進せんとし、その為に台湾文化のあるべき
ものとして如何なるものを要求するかを本島文化人に
示すものたる性質を自ら帯びることである。

皇民奉公会による大東亜文学者大会出席者への台湾文学
賞授賞は、台湾文化が大東亜の一環として建設されること

への、総督府の期待を示しているといえよう。

そのほか、『文芸台湾』社も「文芸台湾賞」を主催した。文芸台湾賞設立の趣旨は、台湾文化の健全な発展を願う、文学による臣道の実践を追求し、それをもって日本南方文学の樹立を期することにあつた。⁽⁶⁵⁾西川満の主導により、第一回文芸台湾賞は周金波の「志願兵」と川合三良の「転校」に決定し、また第二回は、長崎浩と新垣宏一に授賞された。戦時期、在日日本人文学者による「外地文学論」・「南方文学論」が台湾を大東亜文学圏の一翼を担う存在に押し上げようとしていたが、それに並行した文学賞システムの成立もまた、台湾文学を大きく発展させた。⁽⁶⁶⁾『台湾文学』も一九四三年に「台湾文学賞」を設け、呂赫若の「財子寿」が第一回目の荣誉に輝いた。『台湾文学』編集部は「台湾文学賞」設定について「一文で、台湾文学賞設定の目的を明らかにしている。主な授賞対象については、「文学による台湾文化の向上に寄与したる作家に之を贈り、以て台湾の文学運動に更に一段の貢献を遂げる事となつた」⁽⁶⁷⁾とある。呂赫若の「財子寿」は、台湾の家族制度を題材にした物語である。台湾を描くことで台湾文学を推進させるといふのは、まさに台湾文学賞の重要な目標であつた。「文学賞」設立の背後には、文化人による台湾文学の未来への方向づけが表れている。おおまかにまとめると、文学賞の設立は、文化芸術の思想戦略における効用を

安定させたほか、創作の方向性を企画することで、総督府の文化動員政策のための人材育成の役割をも果たした。文学賞は、作家を持続的な創作に駆り立てるための原動力であり、また総督府にとつても、戦局がまだまだはっきりとしない状況下で、日本内地に対する「外地文学」の確立を容易にするものであつた。後に戦況が急転しても、文学賞によつて鑄造された作家たちは、文字で国策を宣伝する大任を、十分に担うことができたのである。

おわりに

本文は植民地における動員という角度から、皇民文学の提唱・国家政策と地方主義の観点・文芸翼賛政策の体制化の過程・統合機関と文学者大会・文学賞と文学会議などを通して奉公政策の仕組みと国家機関の影響力を考察し、それによつて植民地の「大東亜」イメージを解釈してきた。同化政策と日中戦争後の皇民化運動の影響は、戦時期を研究する上で軽視できないものであり、国家機関による同化収容の作用もまた、今後決戦期の台湾文学史を討論する際、疎かにできない部分である。国家機関の政策の下、戦時期に登場し、活躍した作家たちの、文学表現と時代的な発言および奉公の経験は、すべて台湾文学史上の重要な記録である。日本の敗戦によつて、一体化の思想は幻影と

なつたものの、「大東亜文学圏」の建設は、台湾と日本の作家に、共に手を携えて新たな文学史を築く機会をもたらした、また『紅樓夢』・『水滸伝』・『西遊記』の翻訳書などの中国文学を改めて台湾に流入させた。日本と中国を中心とするアジア構想のなかで、台湾はそれらの文化が融合した姿でもって文壇で活躍することを可能にしたのであった。

この「皇民文学」を主軸とする戦時期の台湾文壇において、各作家はそれぞれの表現を行い、台湾文学史は大東亜の骨格のなかで多くの積み重ねを有することとなった。大東亜の文壇で、台湾の動員以外に注目すべきは、植民地として台湾と同様の立場にあつた朝鮮である。今後、朝鮮が動員翼賛思潮に直面した際の文壇の概況、大東亜思想が注入された後の東亜イメージの各地での展開、その再現などを台湾の概況と比較することで、大東亜文学圏の概況について、より一層の理解が得られることであろう。

注

〈1〉小林躋造は、日本の東亜建設政策に呼应し、一九三六年の台湾総督就任の際に有名な「治台三策」を提出し、日本帝国における台湾の地位を定めた。小林総督は「内台一如、教育の振興、現有の農産業以外に工業を奨励する、南方進出を平和裏に進める」との方向性を打ち出した。これ

はのちに「南進化・工業化・皇民化」とまとめられたが、その目的は、日本の南進に必要な物資を生産させ、帝国の侵略を支える種々の資本を引き出し、それによって西南太平洋を発展させることであつた。この策略はのちに台湾の戦時期における主要な指導方針となつた。

〈2〉神田喜一郎・島田謹二「台湾の文学について」『愛書』一四、一九四一年五月。

〈3〉田子浩は「陳夫人に就いて」のなかで、以下のように述べている。「然し本島人は今や変りつつある。時代の波は本島人をゆり動かし、その民族的な部分は日を追ふて変りつつある。『台湾文学』創刊号、一九四一年五月、九八頁参照。

〈4〉楊逵は、「自由労働者の生活断面——どうすれあ餓死しねえんだ？」（『号外』第二号、一九二七年九月）、「新聞配達夫」（『文学評論』一卷八号、一九三四年一〇月）のなかで、植民地の青年が内地に出たときに直面する抑圧と不公平を描く一方で、植民者のすべてが抑圧者ではないことを指摘し、植民者にも階級的な不公平と搾取があることを書き出した。楊逵の創作の視点は、民族的な差別よりも階級による差別へより多くの関心を注いでいる。

〈5〉皇民化運動は、宗教・創氏改名・国語運動・志願兵などの制度によって展開された。特に国語運動に関していえば、統計によると一九四〇年の台湾の「国語を解する者」は五一パーセントに達し、総督府の台湾「脱漢化」政策に相当大きな効果を齎した。詳しくは、周婉窈「従比較的観

点看台湾与韓国的皇民化運動」(同氏の著書『海行兮的年代——日本殖民統治末期台湾史論集』収録、台北・允晨文化、二〇〇三年、三三一—七五頁)を参照のこと。

〔6〕一九三七年四月一日、『台湾日日新報』・『台湾新聞』・『台南新報』の三紙が、漢文版を廃止した。『台湾新民報』の漢文版は紙面を半分縮小するにとどまったが、その後六月一日限りで全面廃止となった。葉榮鐘『日抛下台湾大事年表』台中・晨星出版、二〇〇〇年、三四〇頁参照。

〔7〕「皇民文学」に対する見方は、長きにわたって「漢奸文学」と定義され、台湾知識分子が植民地権力に迎合あるいは屈服して創作したものであると考えられてきた。この見解については、王曉波「把抵抗深藏在底層——論楊遠〔首陽〕解除記和『皇民文学』」(『文星』一〇一期、一九八六年一月)一三〇頁を参照のこと。しかし、戦時期の台湾社会の動員政策から検証すると、皇民文学には帝国に屈服しそれを讀める内容を含む作品もあるとはいえず、台湾文壇のいわゆる「皇民文学」作品を閲読すれば、当時の知識分子が直面した苦悩と矛盾を見出すことができる。それゆえに、戦時期の台湾文学の解読は、「皇民文学」をいかに読み解くかにかかっているのである。

〔8〕黄得時「晚近台湾文学運動史」『台湾文学』第二卷第二期、台北・啓文社、一九四二年一月、六一—七頁参照。

〔9〕「植民地の同化」問題は、「皇民文学」を論じる際の核心部分である。五〇年にわたる植民統治を受けた台湾社会にとって、植民者への帰従とその過程での価値観の同化に

よる影響は大きい。それゆえ、協力という方向からのみ「皇民文学」を評価すれば、植民地知識分子の抱えた矛盾と煩悶を軽視することになる。拙著「植民地作家書写策略研究——以皇民化運動時期『決戦台湾小説集』为中心」(国立暨南国際大学中国語文学系修士論文、二〇〇一年五月)を参照のこと。

〔10〕盧溝橋事件の勃発後、日本政府は帝国の南方発展根拠地として台湾を確保するため、皇民化運動をさらに強化した。この背景にはまた、本島人が「祖国」の呼び声で中国に転向し、台湾で抗日意識が高まることへの警戒があった。このことは、戦時中に植民地政府が植民地の「人的資源」を非常に重視していたことを意味している。文学活動もまた、同化政策の下で戦時翼賛体制に組み入れられた。多仁安代「大東亜共栄圏と日本語」(東京・勁草書房、二〇〇四年)七二—八五頁参照。

〔11〕『大阪朝日新聞台湾版』一九三七年二月二七日。

〔12〕漢文欄廃止の前日、文教局長は特にこの問題に関する文書「漢文欄廃止と国語常用に就いて」を発表し、同化政策を徹底した。文中には、国語推進政策の重要性が明確に指摘されている。「(国語常用政策)は、国民すべての思想感情をひとつにする。この統制は我々にとって有効であり、国語の影響に頼るべきところは非常に多い」。この文書には、国語政策の洋々たる前途が述べられており、漢文欄廃止に対する有力な肯定論を提出した。国語(日本語)を新聞の共通言語にすることは、総督府が台湾民衆に

日本語を普及させるためにとつた政策のなかでも重要な位置を占めた。このことから、漢語の使用範囲が大きく縮小されたことがわかる。『大阪朝日新聞台湾版』一九三七年三月三一日参照。

〔13〕台湾総督府編『台湾日誌』台北・南天書局、一九九四年、二一〇—二一一頁参照。

〔14〕徐瓊二「邁向台湾文化之路——發展芸術的政治手腕」『台湾芸術』一卷二号、一九四〇年四月。

〔15〕戦時時期における東亜の概念は、時代の特殊性を帯びたものであり、本論はこの東亜概念のみによつて論述を進めている。しかし、近年来「東亜文化圏」についてはさまざまな議論が交わされている。日本では竹内好・溝口雄三・子安宣邦など多くの研究者が、日本と東亜の関係について新たに定義と考察を行っている。日本の戦前・戦後の社会思潮についても検討を行っている。子安宣邦は、「東亜概念と儒学」のなかで以下のように述べている。「二〇世紀の現代史においてはつきりと『負』の刻印を負つたこの地域概念を、われわれは、少なくとも日本人はどのようにして再び口にしようのであろうか。『東亜』概念をふたたびわれわれが口にしようるためには、帝国日本とともにあつたその概念の系譜があらわにされ、その概念の死が見届けられなければならないだろう。そのことを経ずして再興する『東亜』が、帝国日本によるアジア広域圏幻想の再生、帝国の亡霊の言語の出現とならない保証はない」。子安は、ファシズムと密接に関係した戦時時期の大東亜の概念を明確に切

り離して考え、新たな東アジア地域概念から東亜を検証している。子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか——近代日本のオリエンタリズム』（東京・藤原書店、二〇〇三年）一七三—一九八頁参照。

〔16〕張星建「翻訳文学について」『台湾文学』二巻一号、一九四二年二月、七頁参照。

〔17〕呂赫若「呂赫若日記」台南・国家文学館、二〇〇四年、八四頁参照。

〔18〕張星建「對於台湾芸術界的期許」『台湾芸術』三巻一号、一九四二年一月、一五頁参照。

〔19〕田中保男「わたしはそう思ふ——台湾文学のために」『台湾公論』八巻五号、一九四三年五月、八五頁参照。

〔20〕西川満「文芸時評」『台湾文学』六巻二号、一九四三年六月、二九頁参照。

〔21〕井出勇「決戦時期台湾的日人作家与皇民文学」台南・台南市立図書館、二〇〇一年。

〔22〕周婉窈は、日本が台湾を支配した翌年には日本語を国語と称したことについて、近代民族国家意識の興隆との密接な関係を指摘した。「日本の殖民統治帶來了一個与近代国家息息相關的国語概念、這對台灣人而言是全新的東西」（日本の殖民統治は近代国家と密接に関連する国語概念をもたらししたが、これは台湾人にとって全く新しい概念であった）。周婉窈『海行兮的年代——日本殖民統治末期台湾史論集』（台北・允晨文化、二〇〇三年）八〇頁参照。ほかに、E. J. Hobsbawm もまた、「国語」と早期民族国家の

関係について詳細に論じている。E. J. Hobsbawm 著、李金梅訳『民族与民族主義』（台北：麦田出版、一九九七年）六三一—一〇二頁参照。

〈23〉「国民の奮起と自覚を望む——内務大臣後藤文夫」『新高新報』一九三六年一月一日。

〈24〉「国家総動員に就いて——台湾軍司令部」『台南新報』一九三六年一〇月三二日。

〈25〉遠山茂樹・今井清一・藤原彰『昭和史』東京：岩波書店、一九五九年。

〈26〉『翼賛国民運動史』（東京：翼賛運動史刊行会）一三七—一三八頁参照。

〈27〉北河賢三編『資料集 総力戦と文化』第一巻 大政翼賛会文化部と翼賛文化運動（東京：大月書店、二〇〇〇年）三—四頁参照。

〈28〉翼賛会という「地方文化」とは、都会以外のその他の地区の文化を意味し、「外地文化」とは日本本土以外の文化、または日本の植民地およびその他の占領区の文化を指した。

〈29〉Benedict Richard O'Gorman Anderson は「想像の共同体」のなかで、インドネシアの歴史から「コロニアル・ナショナリズム」(colonial nationalism) を定義し、どの民族主義的領土範囲も、その形状は旧態的な帝国行政単位と似通っていると指摘した。植民地政府と植民統治からやや後にあらわれる企業資本は、植民母国の民族と植民地の人民の間の言語媒介としての役割を果たすことのできる、双

方の言語に通じた若者を必要とする。国家の行政規模が拡大するにつれて、その内部の二重言語巡礼者の群も拡張する。知識分子の識字能力と二重言語能力は、均質で空虚な時間概念に漂うなかで、想像の共同体を形成することを可能にする。日本が台湾を植民統治した時期、同様に日本語と漢語に通じた知識分子が出現し、植民者と植民地民衆を仲介する役割を演じた事実についても、アンダーソンの東南アジアについての論証から思索をすすめることができる。日本帝国は教育政策によって、この種の植民母国と植民地双方の懸け橋となる台湾知識人を育成しよう企図し、またそれを動員の最大の基礎とした。B. Anderson 著、吳叡人訳「想像の共同体——民族の起源と散布」（台北：時報文化出版、一九九九年）一三三—一四四頁参照。

〈30〉張文環「台湾文学の将来について」『台湾芸術』一卷一号、一九四〇年三月。

〈31〉何義麟「台湾知識人の苦悩」松浦政孝編『昭和・アジア主義の実像——帝国日本と台湾・南洋』・「南支那」(東京：ミネルヴァ書房、二〇〇七年)収録、三〇五—三〇六頁参照。

〈32〉台湾総督府編『台湾総督府事務成績提要』四八編(上)、昭和十七年度、七七頁。

〈33〉台湾総督府『台湾事情(昭和十七年版)』二〇六頁。

〈34〉同右、一八一—一八二頁。

〈35〉「銃後人に多大の感銘——賑はった文芸銃後運動講演の夕」『台湾日日新報』一九四〇年二月一七日。

〔36〕 鷲巢敦哉『台湾保甲皇民化説本』（東京：日東印刷、一九四一年）三十四頁。中島利郎・吉原文司編『鷲巢敦哉著作集』別巻、復刻版（東京：緑蔭書房、二〇〇二年）収録。

〔37〕 皇民奉公会中央本部刊『新建設』創刊号、一九四二年一〇月、一頁。

〔38〕 『興南新聞』四二五八号、一九四二年八月一七日。

〔39〕 矢野峰人『台湾文学の黎明』、『文芸台湾』五巻三号、一九四二年一二月、六頁。

〔40〕 鹿子木龍（中山侑）「見損なつた浜田隼雄」、『中央論』七巻七号、一九四二年七月、五八頁。

〔41〕 『日本文学報国会要綱』、『日本文学芸新聞』一四二号、一九四二年一月一日。

〔42〕 『文芸年鑑』、櫻本富雄『日本文学報国会——大東亜戦争下の文学者たち』（東京：青木書店、一九九五年）一四一頁より。

〔43〕 同右、一四二頁。

〔44〕 『日本文学芸新聞』一四二号、一九四二年一月一日。

〔45〕 楊達「大東亜文学者会議に際して」、『台湾時報』二七五号、一九四二年一月一〇日、一一八頁。

〔46〕 同右、四七九頁。

〔47〕 春山行夫「大東亜文学者大会の力点」、『日本文学芸新聞』一四二号、一九四二年一月一日。

〔48〕 『日本文学芸新聞』一四三号、一九四二年一月一五日、または「大東亜文学者大会速記抄」参照。『文芸台

湾』五巻三号、一九四二年二月、二二—二五頁。『台湾文学』三巻一号、一九四三年一月、六四—七一頁。

〔49〕 同右、『台湾文学』三巻一号、六三—六六頁。

〔50〕 同右。

〔51〕 西川満「隣組にも文学を」、『新建設』二巻一号、一九四三年一月、三八—三九頁。

〔52〕 張文環「内地より帰て」、『台湾文学』三巻一号、一九四三年一月、七一—七三頁。

〔53〕 『文学報国』一九四三年八月二〇日。

〔54〕 『朝日新聞』一九四三年八月号の「記事索引——特集記事」には、大東亜文学者大会特集の記録がある。順に、「大東亜文学者大会に望む」・「文学者・大会出席代表者の言葉」・「大東亜文学者大会に捧ぐ」・「今日、満・支の文人迎う」・「大東亜文学者鼎談会」・「受賞の作品と人」・「大東亜文学者大会を顧み」。

〔55〕 尾崎秀樹「近代文学の傷跡——旧植民地文学論」東京：岩波書店、一九九一年、七—八頁参照。

〔56〕 「第三回大東亜文学者大会宣言」、『文学報国』四三号、一九四五年一月一日。

〔57〕 「台湾決戦文学会議」の開催とその詳細な内容については、『文芸台湾』七巻二号（一九四四年一月）および『台湾文学』四巻二号（一九四三年十二月）を参照のこと。

〔58〕 『台湾文学』四巻一号、一九四三年十二月、三七頁。

〔59〕 「台湾決戦会議」、『文芸台湾』終刊号、一九四四年一月、三二—三三頁。

- 〈60〉 注(35)に同じ。
 〈61〉 『文芸台湾』五卷三号、一九四二年一月、三八―三九頁。
 〈62〉 「前線銃後繋ぐ楔——文学戦士烈烈の雄叫び」『台湾日日新報』一九四三年三月一日。
 〈63〉 「台南文学座談会」『文芸台湾』五卷五号、一九四三年三月、二―一五頁。
 〈64〉 角行兵衛「戦争と台湾文化賞」『台湾時報』二七九号、一九四三年三月五日、一一―一頁。
 〈65〉 「文芸台湾賞」の設立趣旨に関しては、『文芸台湾』一卷六号(一九四〇年十二月)二頁を参照のこと。
 〈66〉 「文芸台湾賞」受賞者一覧は、『文芸台湾』四卷三号(一九四二年六月)の二六―二八頁と、六卷四号(一九四三年八月)の三八―三九頁を参照のこと。
 〈67〉 台湾文学編輯部(台湾文学賞)設定について『台湾文学』二卷四号、一九四二年一〇月、一六頁。